

## 渡辺澄夫先生を偲びて

大 塚 主

四二

先生との最初の出会い、昭和七年、大分師範の寄宿舎である。各学年一名ずつの五名が一部屋で、室長は「澄さん」こと渡辺澄夫氏、四年生は「茂君」と呼ばれる大物、二年生は剣道三昧の正義感溢れる頃の私である。

室長は高等師範入試を目前にして、口管勉強で、脇目も振らない。話もしない。四年生の茂君は佐藤姓で、卒業後すぐに村会議長となり村長となり、政界に一気に馳上った異才である。私は、校則や寄宿舎の取決めは眼中にない茂君とは話が合わず、毎日喧嘩する。一戦がすむと、室長が頭を上げて、ニコリと笑う。三年生と一年生は飛び火を怖れてオロオロ。

時々、室長の「澄さん」と二人きりになると、秀才の評価などをした。国漢英数などの主要教科の評定の乙の教で決めるのである。科目が二十位あるので、乙が半数以下であれば優等生となる。この評価によると、学校の通信簿の優等生は逆転して劣等生となる。

この陰の通信簿によると、学校一の秀才は乙の数が三の室長「澄さん」ということになるが、これは②。

其の後は別々の道を歩いた。私は科学教育に没頭した。ところが、身辺に歴史づく事が続発した。これは人生の成熟期の徴候かも知れない。科学的志向で郷土史を見たい。

こんな時誰かが「澄さんの中世史は日本一」と教えてくれた。陰の評価は正しかったのである。

早速、昔の室長の「澄さん」との旧交を温め、弟子入りをした。中世文書の解説は難しい。それを手取り足取りして教えてくれた。日本一の魅力が教室を充たしていた。

この間、小著「前岡城物語」の序文をお願いした。大変褒めて書いて下さった。

昨年十二月六日(土)例の如く古文書研究会が行われた。辞去する時に折角廊下まで出られて「御世話になりました」と謂われた。これが、先生との別れになってしまった。

年晦る 御世話でしたと 計きし人

(追記) 茂君の消息は判らない。戦死かも知れぬ。一年生は在学中に死亡した。三年生は始めから教員名簿に無い。他県に出た。